

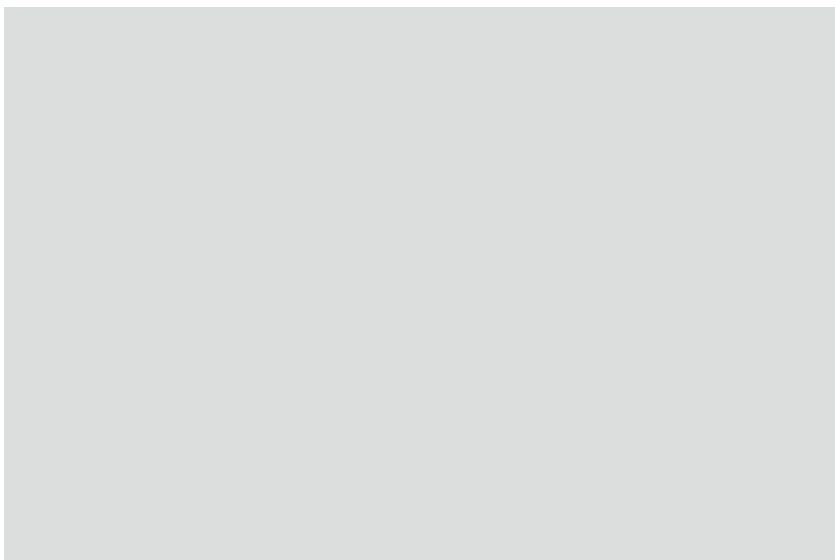
終える命

つなぐいのち

國
森
康
弘

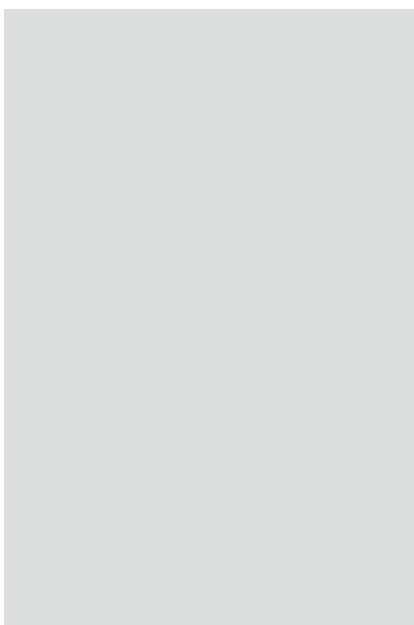
第
3
回
空
泳
ぐ
龍
の
虹

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

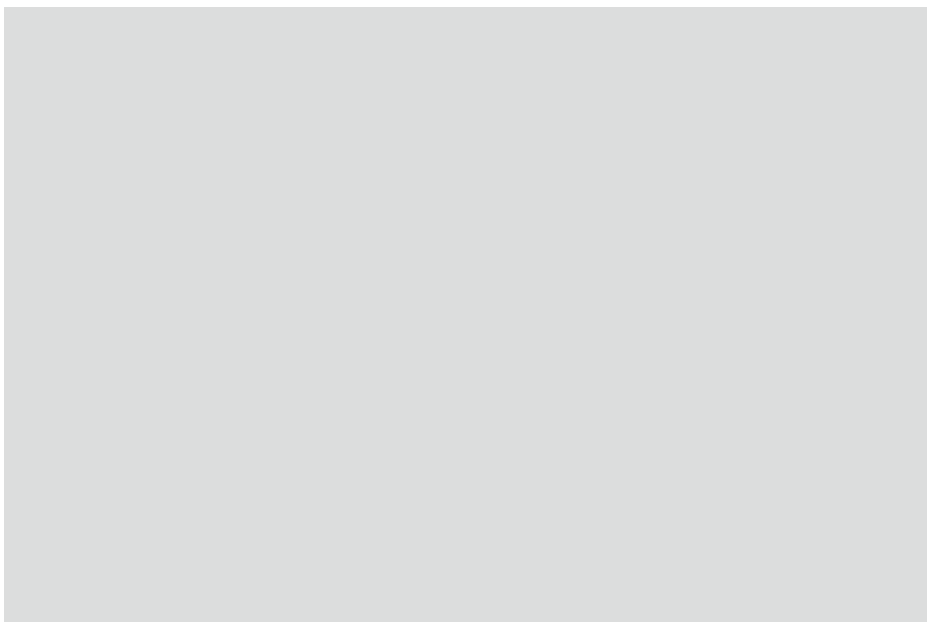


だんだん、
そっくりに。

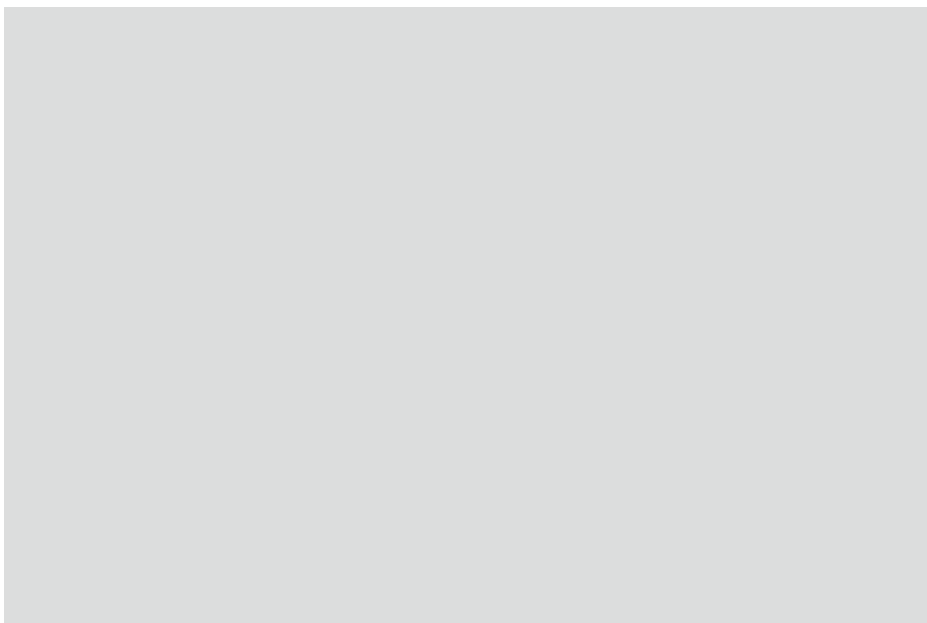
長年連れ添ってきた伴侶。



時には手を握り、成長期の顔々を眺める。



跡取り息子は病身を押し、つとめる。



息が止まった祖父の、旅支度。

お

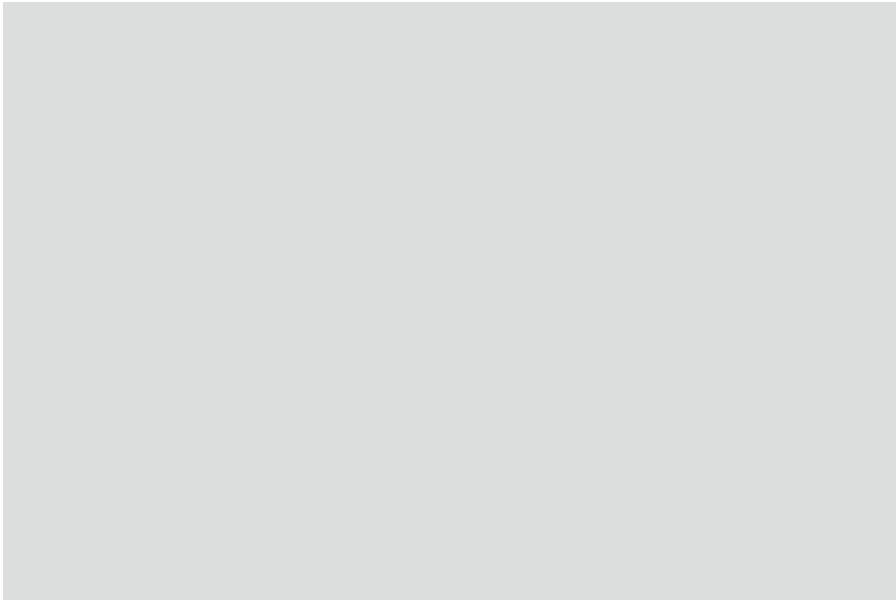
っさん（和尚さん）、ただいま〜！」

学校帰りの孫たちがいつものように顔をのぞかせると、朝男さんの顔がほころんだ。

滋賀県東近江市にある寺の住職だった朝男さんは長年、午前2時半に起きてお経を読んできた。もともとは柔道で鍛えたがっしりした体つき。厳しい修行とおつとめを重ねてきた朝男さんに、胃がんが見つかった。手術をしたもののやがて寝たきりになり、やせ細っていく。辰年の83歳。連れ添う妻、白血病を患った跡取り息子と嫁、日に日に大きくなる4人の孫と暮らした。3世代で過ごすこの家と、隣接の寺に、朝男さんの「居場所」があった。父の代わりに、息子が病身を押し、つとめを果たす。朝男さんは近くの寢室でそのお経に耳を傾けながら、静かにうなずいていた。

永源寺診療所の花戸貴司医師がよく訪問診療に来てくれる。この医師は外来でも訪問先でも、毎回のようになんか質問をした。「口からごはんを食べられなくなった、寝たきりになったりしたら、どうしますか。病院に行きたいですか」。

朝男さんはいつも首を横に振って、「家族がそばにおるし、家がいちばんええ」と、きっぱり。家族はそのやり取りをよく聞いていた。



「あゝ、気持ちええ……」。週2回の風呂は、至福のとき。花戸医師や看護師、ヘルパーらに支えられながら、日常の暮らしのなかで家族は寄り添った。抗がん剤や点滴は使わない。その朝男さんに苦しい表情はない。

老いと病、そして死を、小中高生の孫たちは目の当たりにし、肌で知る。朝男さんの正面には、やせ細った「釈迦苦行像」の写真が飾ってあった。「おっさん、このお釈迦さんそっくりになってきたなあ」。「骨と皮だけ」になった朝男さんの表情は、穏やかだ。

ある夏の夕方、帰る花戸医師に手をあげ、「ありがとう」と礼をした。何時間かのち、家族が見ていない、ほんの短い間を選ぶかのように、息を引き取った。孫たちが体を拭き、髪を剃り、着物を着せて、泣いた。晴天の日、大勢が参列した葬儀。小学5年生の孫が遺影を抱いて外へ。続いて、花に囲まれた朝男さんの棺が寺から出た。

そのとき空の青に、七色の光が突然浮かび上がる。円形でも、半円でもなく、一筋の虹。「り、龍や」。参列者が声を上げた。龍は仏教の守護神とされる。

数々の写真。そこに写るのは、「無に帰す死」ではなく、「いのちをつなぐ生」だった。

〈滋賀県東近江市にて2012年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。